

小野 あずさ

目のごちそう

劇的な雲色のグラデーションに魅せられて感動したり、人気のない高台から遠くの街の景色を見て、目の静寂を楽しんだり、湿ったアスファルトを見て憂鬱になったり、視覚から得る、感動や喜び、安らぎや憂愁は、人によって違います。

どうやって視覚情報が感情に悪えるかの過程を考えた時に、面白いと思うのは、文字を読むという視覚的行動です。ビジュアルのコントラストや、質感を楽しむというよりも、目から入ってくる文字の構成を目で食べて、頭で想像して、心で消化するという過程が、上であげたような、視覚から直接的に受ける感動とは違うからです。直接、目で見て（ビジュアルだけで）感動するときは、それを頭で想像する必要がほとんどなく、ダイレクトに感情を動かす、目→心という一直線な気がします。同じ視覚行動にも関わらず、読むことは目→頭→心という流れになってくる。頭＝想像＝フィルターのようなものがワンクッション入ってくるという点が、照明の仕事に通底していると思いました。

台本を舞台上で再現する現場で、我々照明デザイナーは、（色だけに限らず）フィルターという我々の想像力を、観客の想像フィルターと重ね合わせるという、化学反応を起こしていると思うと、演劇って面白いなと思います。だから、舞台を観に行くということは、制作側も含め、何百何千人と一緒に本を読みに行くような、いや、本（舞台）を目で読みながら、直感的な目のごちそうまで味わえる。いわば、綺麗な夕日に包まれながら、ハンモックに揺られ、読書をし、自分の感情に浸れる、パーソナル状態に入るということ。なんと画期的な文化を人類は生み出したのでしょう。映画やテレビと違う点は、我々のフィルターは、観客のフィルター無しでは成立しないことが多いことでしょうか。（「舞台を離れた分際で、今更演劇の基礎を語るな！」と先輩方の怒りの声が聞こえてきそうです。）

視覚伝達の仕事をしている上で、目は体の中で一番大事な部分です。「一番大事なのは心だ！」と、あかり組の三澤さんならおっしゃいそうですが（笑）。実は私は、普通の人よりも、光を眩しく感じる方だと思います。生まれた時から、少し白内障があるということは知っていました。でも、白内障が多少あるからといって見えないわけではなく、光を敏感に感じるくらいで、12年ほど前に、アイ・レーシック施術をした甲斐もあり、現在視力は1.5強ありますし、色も普通に見えています。光に敏感というのは、照明家なら誰でもそうなのかもしれません。ですが、自分の光の見え方は、他の人と比べてちょっと特殊かなと、ここ十数年ほど感じていました。レーシックをやって、遠くがすっきり見えるようになってからか、より世界が美しく鮮やかになった気がします（気だけかもしれませんが）。何よりも、自分の中での楽しみは、光源（フィラメント等）が少しスパークルしたように見え、街の風景がロマンティックに浮き上がるという現象でしょうか。「え？それで照明デザインなんて務まるの？」と思われるかもしれませんが、そういう自分の目の見え方のお陰で、光に対して敏感になれるし、光に魅了され続けてきたのだと思います。

最近は、新しい仕事場でコンピューターと毎日長時間睨めっこという日が続いていて、目を酷使しているので、目を休ませなければと思いつつ、なかなかできていない今日この頃です。暗闇の中でうごめく照明も恋しいですが、新しい仕事は覚えることが山ほどあるので、慣れるまで弱音を吐いてはいられません。また次の機会に、新しい仕事について書かせていただきたいと思います。

目のごちそうといえば、最近はロンドンの運河沿いを自転車で通勤しているので、帰り道に時間があるときは、小さな橋の下で数分止まって、橋の裏に映り込む太陽の水反射をぼんやり眺めるのが、癒しのひと時になっています。舞台を離れてから、現場での目→頭→心の循環スピードが、いきなりスローモーションになった今だからこそ、目のごちそうに出会えたら、頭を空っぽにして、目→心への自然な循環に身を任せたいと思う今日この頃です。



ロンドンの運河からの贈り物